「岡崎」のなかった頃の岡崎学－古墳時代～古代の西三河－

岡崎市美術博物館
副館長　荒井信貴

私は元々考古学という専攻をずっと勉強してきて、岡崎市役所に入ってからもずっと遺跡の発掘調査をしておりました。ただ、部署がかわり平成８年の美術博物館オープン以来、実はあまり考古学的な事を仕事としてはやっておりません。下手をすると絵の話を延々とやっているというところで、館の雑用を一手に引き受けてきたようなところがあります。そんなわけで、あまり最新情報をお伝え出来るかどうかかわりませんけれども、今日は考古学から見た岡崎学という事で、お話をさせて頂きます。

１．岡崎とは

最初にこのお話を頂いた時に、岡崎学ということで何か古い方のお話をという話をされた時に、凄い戸惑いがありました。それは何かというと、我々が扱う考古学の分野、縄文、弥生、古墳という時代に、岡崎という区切りはないわけですよ。我々も遺跡を紹介する時には、岡崎市という区切りで色々、市内にはこういう遺跡がありますよという話をしていくわけなのですが。実際、その当時に岡崎っていうのがあったかというと、別に僕らが今みる時点の市域というのがあるわけではなく、当時住んでいた人は、自分達が岡崎市に住んでいるなんて誰も考えていないわけですよね。それで、何の話をすれば良いのかなと戸惑ったわけです。

「岡崎学」というのは、今各地で盛んに「地域学」と言われている学問のひとつで、学問というより、地域おこしをしたり、地域について詳しく捉えなおそうという、そういう活動の中のひとつにだと思います。「地域学」でいう「地域」とはいったい何だろうと思ったので、一度広辞苑で調べてみました。そうしたら地域は「区切られた土地」となっていました。「区切られた」といっても、誰が区切るんだ、ということになるわけですよね。

たとえば、岡崎市は今額田町合併して、昔より随分幅広くなりましたが、今、私たちがごく体感的な形で、岡崎市といっている岡崎はそもそもどっちなのか。もっと遡ってみると、明治の時に、岡崎の市制が始まった時には、岡崎市の横には岡崎町というのがあったわけです。また、私が市役所入った頃は、岩津地区辺りへ行くと、市の中心部に行く時には、皆さんが「ちょっと岡崎に行ってくる」と言っていました。「岩津は岡崎じゃないのか？」という感じになるわけです。

地域はまとまりがあるけれども、どこかあやふやな部分があり、色んな人がそれに対して様々な区切りを入れていくものだと思います。例えば岡崎藩、岡崎藩領といいますが、奥殿町は違うという話になりますし、逆に言えば岡崎藩の有名な「手永」という制度が江戸時代にはあるわけですけれども、手永のひとつ、上野手永は今の豊田市に入ってくるわけです。そのように地域と一口にいっても、結構、伸び縮みをしているものな

のです。そのような状態なので、今日は考古学の分野としては、ざくっとこの地域ということで話をさせて頂こうと考えています。

２.地域学

考古学から地域学というのを捉えた時に、実は欧米で先に始まっています。有名なのが良くテレビに早稲田大学の先生なんかが出てくるのですが、あの先生を紹介するのに考古学者と言ったり、エジプト学者という表現があります。１９世紀、ヨーロッパの人達がヨーロッパを中心にして世界を考えていた時期に、植民地政策でどんどん自分達の場を広げていきますが、ヨーロッパの文化伝統と全く違うところに入り込んでしまいます。そのため、その地を知るために非常に総合的な勉強をする学問が成立していくのです。そのような学問のひとつがエジプト学です。私は、地域学と言うとすぐアラビアのロレンスを思い出します。あの人は実はヨーロッパにおける地域学、エジプト学やアッシリア学とか、そういった学問の担い手でした。オックスフォードでロレンスはウーリーというアッシリオロジー、エジプトロジーの大先生について研究していたわけです。それが最前線のアラビア半島に送り込まれたのは、何故か。遺跡を学問として勉強しているからです。考古学的な遺跡のことをよく知っている（地理をよく知っている）だけでなく、語学が出来るんです。また、風俗だとかそういうものも勉強しているわけです。エジプト学とかアッシリア学というのは、そういう意味で非常にトータルな学問です。１９世紀、ナポレオンが侵略をしてエジプトを征服して色々良い物をヨーロッパへ持ってきた。それをこつこつと勉強していく中で、エジプト学は成立してきたわけです。地域を解き明かすということで、考古学や美術史、あと言語学、地理や風俗も勉強する、そのような非常にトータルな学問として発展していったのが、地域学だと思います。

では、日本はどうなのかと。日本もこつこつとはやってきていますが、それも時代の認識の中で少しずつ変わってきます。皆さんにもまた色々地域の事を勉強して頂けるとありがたいと思うんですけれども。例えば岡崎では、誇っても良いものとして、実は古い『岡崎市史』という立派な本があります。柴田顕正という人がまとめた市史ですが、それは岡崎を中心に置きながらかなり広い範囲の事が詳細に調べられ書かれています。２０巻に及ぶ後の『新編岡崎市史』にも、合併する前の額田の資料がきちんと載っていたりします。日本における地域の研究というのは、市町村町史が基本となりますが、江戸時代の地誌、明治に入ってから郡史が出来たり、町村史が出来たりということで、地道に位置がされ続けられていますが、どうしても市町村域という壁をなかなか乗り越えられないのが実情だったと思います。

今我々が「何となく同じまとまりじゃないか」という地域のまとまりというのは、多分歴史の中では戦国時代に始まっていると言われています。それまでは人口も少ないですし、例えば古代なんかでいきますと、地域を統べるべき国司という人達は都に居て、地方の人を使いながら色々やっていくというような形で、ルートとして中央と地方が別々の機能をもっていたのです。例えば経済的な事でも地域で収められた物を都に運ぶ。都で経済活動をやって、それがまた地域に還元される。非常に幅広い、ある面言ってしまえば非常に長い流通のルートを持って成立していたのが、中世前半までの世界でした。

戦国時代、領主が出てきて、城下町が出来て、経済も狭い地域である程度完結出来るようになりました。そのようなかたちの中で地域性が出来てきたのが戦国時代だと言われています。

地域学が、最近頓に叫ばれています。網野善彦先生という方が、歴史研究の分野について、日本史の教科書に載る歴史は、中央の歴史を中心にずっと描かれているが、それ以外の部分もいっぱいある、ということを言っています。例えば日本は稲作農耕の農耕民だというふうに言われていますが、稲作を営んでいる人は米ばかり食べていたわけではありません。皆さんそうですけれども野菜食べるでしょう。いくら戦前の日本人があんまり肉を食べないと言われたって魚や野菜も食べていた。これは縄文人だって同じで、肉ばかり食べていたかと言うと決してそうではないのです。肉ばかり食べていたらどうなるか。それは皆さんがご承知の事だと思います。たとえば、コレステロールや血糖値が高くなるといったことがあり得るわけですよね。縄文人は、実は狩りをやって狩猟採取で獣ばかり食べていたわけじゃないのです。ドングリや栗だとか食べられる木の実を食べていました。ドングリもきちんとアク抜きをしながら粉にして、お米の代わりになるわけですよ。そういうような食べ方をしています。

中央の歴史、という枠にはまった形ではない世界があるんじゃないかということです。たとえば、網野先生は日本海側について色々資料を集められています。日本海というと私達、太平洋側の人間からすると、すぐに裏日本というでしょう。でも裏日本って本当に言えるのか。裏じゃないかもしれない。ある時は表だったかもしれない。地域の見方を変えれば、歴史そのものが、色んなところに光りを与える事によって、地域が全然違う目で見えてくることがあるのではないかというような事が言われ始めています。網野先生の言葉に、「日本海―海は隔てるものではなくてつなぐものである」という有名な言葉があります。例えば日本海側、隔てるものではなくてつなげるものだというふうに考えるとどこにつながってきます？すぐ大陸につながるわけです。中国や朝鮮半島の文化との直結地帯です。そういうふうに見方を変えていく、そういった意味での地域の見直しを少しずつ図っていこうという活動が、網野先生をはじめにしながら進んで来ています。

東北芸工大にみえる赤坂先生なんかが言い始めた東北学。東北学って言うとなんとなく中央から攻めてこられた蝦夷の地域というイメージが強いでしょうが、決してそんなことはない。地域の独自性を持っていたからこそ、平泉みたいなあれだけの文化を保ちえる世界を作ったのだと思います。

これはもっと古い時代を見れば、古墳もそうです。決して何も中央である近畿地方から文化が波及していくだけではない。関東から色んな物も入ってきたというのが最近判ってきています。

これは余談ですけれども、今、安城で三河の古墳という展覧会をやっています。これは非常に良い展覧会で、今日も一部それを参考にしてお話をさせて頂きますけれど、その企画過程での話です。実は豊田で出土した遺物を撮った写真が、旧の『岡崎市史』に載っています。第８巻の名勝旧跡および風俗をとりあげた一冊なのですけれども、そこ

には亡くなった人の頭のところに添える石で作った枕、石枕の写真があったのです。そのことを話していたら、同じようなものが豊橋でも出ていることがわかりました。豊橋の古墳時代を専門にやっている人から聞くと、それは常総型の石枕だと言われたのです。常総型の「常」は「常磐」の「常」です。「総」は「上総」だとか「下総」とかいう、いわゆる千葉県、茨城県を中心にした地域に多く出土しているものだったのです。その分布の西端は、今まで豊橋までとされていたのです。それが、『岡崎市史』に載っている写真で、豊田にも石枕があったことがわかったのです。東の地域にあった文化が、この近辺まで伝えられてきているということです。

このように地域学というのが少しずつ盛んになってきます。基本的には従来の歴史観ではない、地域の独自性みたいなものをどうしたら見つけられるか。それが見つかればどう歴史が変わって見られるか。同じく網野さんと一緒に地域学というのを始められた、同志社大学に長くお勤めでした森浩一先生が、「地域学は地域を勇気づける学問だ」というようなことをおっしゃっています。新しい発見があってそれを勇気にしながら、今までと違う視点から、歴史的なものを新しく見直したならば、それを地域の資産として活用する。この典型例が、例えば吉野ヶ里という九州にある大きな遺跡です。あれも発見された最初の段階では、壊してしまおうという話もありました。青森の三内丸山といった大遺跡が出てきたときもそうです。最初は何でもないものだと思って、後で壊してしまおうという話になったときも、みんながその地域で出土した物をきちんと評価することによって、今までにない地域像を作ることができたわけです。青森の三内丸山では、スタジアムを作るのをやめて遺跡を残しましたが、今では大きな博物館が出来て、地域興しの一番の基点になっています。吉野ヶ里も佐賀県で、これは卑弥呼の国の中のひとつだなんていう話で、どんどん話が大きくなって、今は国の史跡公園としてしっかりと整備がされています。そういうこともあり得るということを、森先生は言ってみえるわけです。そういった些細な発見が、大きいか小さいかは別としても、たったひとりから始まるかもしれないけれども、その価値が少しずつ心の中に膨らんでいって、そして仲間が出来ていけば、町の活力に変わっていくのではないかと思います。

ただ、気をつけなければならないのは、単なるお国自慢に終わらないことです。岡崎の人だと、どなたもが言いますよね。「どこから来ました？」「岡崎です。」「岡崎、ええっと…？」と言われると言うことがなくて、「徳川家康が生まれた町です。」と、それしか言えないわけですよ。徳川家康が岡崎で生まれたのは事実ですから。多分どんな本を読んでも、そういっています。でも、その岡崎を、今ここに住む我々はどう見ているのでしょうか。「今、岡崎に徳川家康の生きていた証ってどこかありますか。」実はほとんどないのです。いろんな人が言いますけれども、「岡崎城があるじゃないか」と。岡崎城は、今見る姿は本多の城でしょう。近世の江戸時代の大名で、岡崎に入ってきたのは、前本多、水野、松平、後本多ですよね。僕はいつもクレームを付けるのですが、「ビスタライン」といって、大樹寺の山門から岡崎城が見えるという話は本当にそうなのかなと。大樹寺、松平の菩提寺からは山門を通してお城が確かに見える。しかし、岡崎城は、将軍家からすると部下の大名の城です。果たして部下の城を崇め奉るかどうか。一方、

岡崎城というのはしっかりと幕府に家康生誕の城としての位置づけがされていたのかもしれない。これは非常に検証が難しいところですね。その辺のことを考えると、実際にちょっと当たり前に言われていることから離れてみると、見え方だって違うのだと思います。岡崎城で基本的に家康時代のものとして残っているものと言えば、産湯の井戸ぐらいですか。でも、産湯の井戸も「本当に家康の時代かな？」という疑問もありますよね。掘ってみないと多分わからないです。西郷濠なんて非常に大きな立派な堀がありますが、あれも誰も客観的な位置づけは出来ていないのが実情です。

今、岐阜市が一生懸命それを克服しようと、信長館を実証的に調査する発掘を行っています。それを少しでも一般の方々に見て頂こうと、発掘調査を公開しています。休み無しで、毎日毎日、担当者は大変なのですけれども。公開をしても、観光客相手ばかりになっても困るわけで、本当は地元の人に来て貰いたいということでやっていると思うのですが。昔から言われているようなことも、客観的な見方をして欲しいと。「昔から言い伝えでこう言われているからそうなのだ」、というレベルで終わらないで、やはり、「本当にそうなのだろうか？」から始まって、それを極めていく、少しずつでも前に探求していくのが歴史をやることの面白味じゃないかなというふうに考えます。

実はこの東海地方で行くと、東海学というのをずっと春日井市がシンポジウムで提唱しています。もう１６回ぐらいになると思います。私も２、３度関わらせていただきました。先程言いました森浩一先生を中心に、もっと地域を広く見ようじゃないかと、東海学をはじめました。それぞれ色んな地域の中のバリエーションを出しながら、それが全体として東海学というまとまりを持ってくるだろうということ、また、色んな見方をするとある一定のまとまりが出てくるだろうということで始まりました。それなら、我々の地域でいえば、三河学という言い方も出来るわけです。もうちょっと狭めれば西三河学、矢作川学みたいな事も出来ます。そういう話の中で、今日は岡崎を基点にしながらもう少し広い世界を、岡崎学というところの糸口にもう少し広い範囲を、これから古墳時代の動きを見ながらお話をしてみたいと思います。その中で、岡崎というまとまりがどうなるかというところを考えて頂ければ良いのではないかと思います。

３．“ 岡崎 ” という呼び名

歴史の中で、岡崎という言葉が初めて出てくるのは、初出は１５世紀です。文明１６年、１４８４年です。室町時代の終わり、戦国時代入った頃、応仁の乱の後でしょう。佐々木町には上宮寺というお寺がありますが、上宮寺末寺帳という、上宮寺を本寺とする下寺をリストアップしたものの中に、一カ所「オカサキ」という記述が出て来ます。それが最初です。あとは室町時代から戦国にかけて連歌が盛んでしたが、宗祗という人が来た時に書いた文章の中に「オカサキ」っていう言葉が出てきています。結局１５世紀以降しか「オカサキ」って言えないんです。それ以前は「オカサキ」ではないのです。だから、今の行政区画ではなく、もっと幅広く岡崎をみながら、今から古墳の話をさせて頂きますので、宜しくお願い致します。

余談ですけれども、上宮寺は実は火災にあっています。上宮寺が燃えたことが、実は

美術博物館が出来たことに関係があります。というのは、上宮寺の火災で貴重な文化財が失われたので、何とか市内にある文化財を何とか守れないかということで、収蔵庫として美術博物館を建てたのです。こういった経緯で、美術博物館では色々なお寺さんから、資料をお預かりしているわけです。この上宮寺は、本当は物凄いお寺です。上宮寺末寺帳というのは、如光というお坊さんの弟子を記しているのですが、如光弟子帳とも一般的には言われています。この如光が居なければ今頃、浄土真宗はなかったかもしれないというぐらいのお坊さんです。如光が居た時代、１５世紀前半台なのですが、その頃浄土真宗で有名だったのは、蓮如さんです。蓮如さんの時代はまだ本願寺が浄土真宗としての独立した宗派にはなっておらず、基本的には比叡山延暦寺の一分派でしかないという位置づけでした。変わった教えを広めるからということで、比叡山に徹底的にいじめられます。蓮如がいじめられている時、如光が三河の真宗の門徒達の浄財を集めて比叡山を説き伏せます。それで、蓮如さんは本願寺の礎を作り、非常に広い布教活動を続けていくわけです。本当に如光さんが居なければ、今頃浄土真宗はなかったかもしれない。如光さんと蓮如さんを一幅に載せた掛け軸もあったのですが、残念ながら燃えてしまいました。それを契機に収蔵施設建設という非常に大きな文化財保護活動につながっていきました。

４．三河という地域

最近、１１月３日に豊橋で文化財講演会というのが開催されて、昨年にひきつづき、今年もテーマが「穂の国」でした。三河の中心地はどこですかと聞いたら皆さんどう答えますか。困るでしょう。なかなか三河という意識で、地域を見たことがないのではないですか。どうしても西三河という括りになる。西三河の中心は岡崎で、東三河の中心は豊橋だという感覚がほとんどではないでしょうか。ただ、奈良時代や平安時代、三河の国の中心がどこにあったのか知っていますか。豊川です。名鉄電車の特急に乗れば東岡崎の次の駅は「国府」ですよね。「国の府」と書いて「こう」と呼ぶ。古代の国の中心はどこにあったかというと、豊川の国府にありました。

西三河というのが本当にひとつの地域のまとまりになるのか。我々は今、三河と一括りにすることが多いです。ただ、天気予報は東三河と西三河分かれています。それはやはり何か違いがあるのです。後の時代になり、支配をする側が三河という大きなまとまりにしてしまったのです。余談ですが、本宿と反対側東側の急勾配を当時の電車が越えられるとか越えられないとかいうことで、今のＪＲ、昔の国鉄がそこに線路を通さなかったという話がありますけれども、確かに、そこで地形が大きく変わるのです。天気の境、地形的な非常に大きな境になっているのですが、そこで西三河と東三河が分かれるわけです。それで三河の西半分は西三河となる。

最近、豊橋は東三河という言葉をあまり使わずに「穂の国」と言うことが多くなっています。ご存知でしたか。これは良いなと思ったのです。向こうが「穂の国」、「穂の国」って言ってくれるなら、三河の中心はこちら側でございますということになります。

事実そうだったのです。文献ではっきりしているのです。『先代旧事本紀』という平

安時代に書かれた資料の中に、「国造本紀」という部分がありまして、そこに国造という、国の一番の偉い人のリストが書き込まれています。この本はずっと偽書といって偽物の本だと言われていました。それは何故かというと、この本の全体に書かれている内容が、物部氏という一族の事を主に書いている。家の由緒を検証する目的で書かれた書物のようで、自分の家を検証して書くということは、往々にして嘘が多くなります。例えば徳川家康は源氏だとか、新田氏の一族だとかいっても、何の補償もないです。系図は後からいくらでも書き換えられますからね。ちょっと有名な家系と、判らないところで筋を結んでしまえば出来てしまいます。一時期、岡崎でも徳川将軍家の末裔っていう人が色々暗躍したこともありました。そのような話から、この本も怪しいから歴史の資料としては使えないだろうということになっていました。ところが、この国造本紀という本に関して、最近、実は歴史的に正しいのではないかと言われるようになりました。何故かというと、国造というのが位置づけられる制度が大体、５世紀から７世紀の間で考えられてきたのですが、６世紀に隋書という、中国の隋が滅びて、唐の時代になってから隋の歴史を書き記した本の中に倭国、日本の事を指してして、１２４国に分かれるということが書いてあります。そして、この国造本紀に書かれている国の数を数えていくと、ほとんど同じになります。だから、６世紀の段階での国造、それぞれの小さな国の事を記したものとしては、この本は正しいのではないかと今は言われています。

この中に出てくるのが、参河国造です。この本では東海道に沿って国の名前を順次列挙しています。河内、和泉、摂津、山城、伊賀、伊勢、島津、志摩、尾張があって、参河それから穂がある。そして遠淡海です。遠淡海と参河の間に穂国がある。これが今、豊橋で言われている「穂の国」のおおもとです。

実は今、飛鳥で色々発掘していまして、宮殿に関する非常に重要な遺跡、明日香に石神遺跡という、甘樫丘という蘇我氏などの屋敷があったというところの下の方なのですが、そこから大量の木簡（文字のかかれた木の札）が出土しています。大化の改新と言われる６４５年、７世紀の後半台の木簡なのですけれども、そこに「三川国穂評穂里穂部佐」という名前が出てきます。「三川国穂評」、三川の国に「穂評」というのがあることを示しています。このもうひとつ前の時代、６世紀の段階での「穂国造」とつながります。だから「参河国造」というのが西三河を指して、「穂国造」というのが大体豊橋の方、東三河を指すというのがこれで分かってきました。

５．西三河の古墳

ここからは、基本的に西三河の古墳の話をさせて頂きます。大体、古墳時代といいますと、今は卑弥呼の時代が終わった後ぐらい、つまり３世紀の後半から、６世紀、７世紀頃をさしています。昔、大化の改新と言われていた６４５年というのが、大体の境にはなっているのですけれども、７世紀の中ごろ。ちなみに、大化の改新というのは、蘇我入鹿を中大兄皇子、中臣鎌足が殺害するという事件と、その段階で出された政治的な改革のことをいいますが、それらが果たして同時であったのか。ひょっとすると改革が部分的に行われたかもしれないけれども、改革自体はもう少し後、天武天皇の時代かも

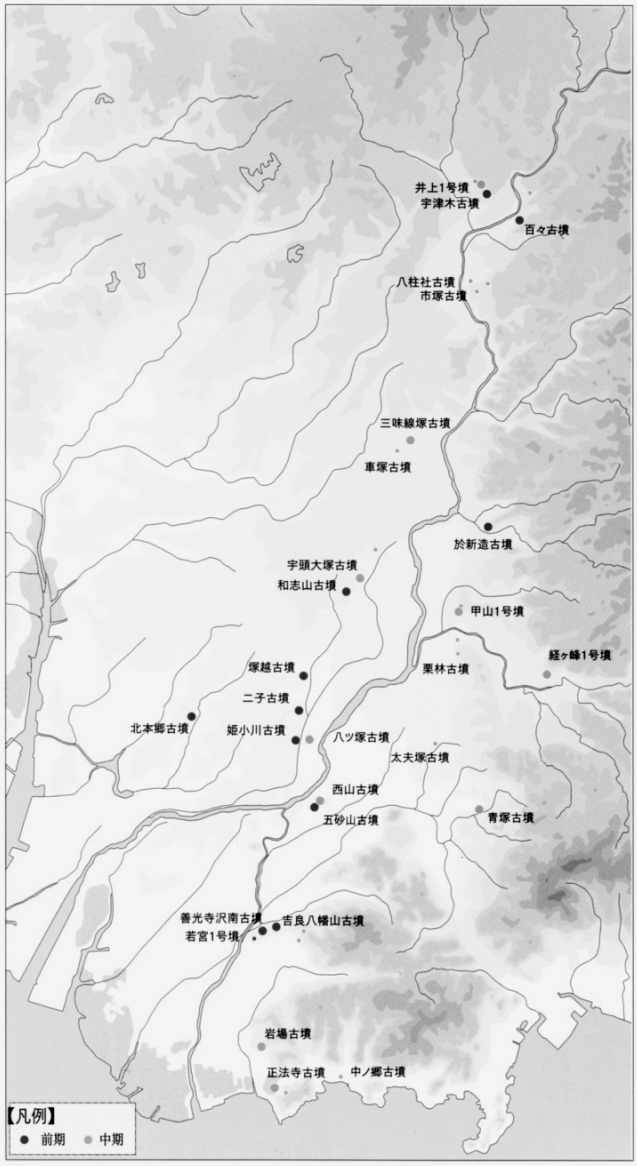
しれないと言われています。

古墳の話に戻りますが、西三河では４世紀前半台の古墳が、矢作川流域に点々と出てきています。ただ、一番古い古墳は残念ながら、岡崎にはありません。安城の二子古墳というのが一番最初です。この周辺にある一群の古墳が非常に古い段階の古墳だといわれています。ほかにも古い古墳は、豊田市の百々に出てきています。

右下にある写真は、「三角縁神獣鏡」という鏡です。縁の部分が実は三角形をしていまして、獣の形や神が鋳出されていますね。そのような鏡なのですけれども、これが実は多分西三河の中でも早い段階の遺物になります。出てきたのは百々古墳と言いますけれども、古墳については良く判っていません。

百々古墳から、この鏡が出てきていたというのが何十年前にやっと判りました。この鏡は実は大阪の博物館が持っていまして、そこに三河百々古墳って書いてあった。誰も気がついていなかったのですが、ある時に偉い先生がみえて、「その鏡は地名から愛知県豊田の古墳のだ」と言ったのが始まりなのです。

この三角縁神獣鏡は、全国的に古い段階の古墳に埋葬されて出てきています。特に畿内中枢部からこのような鏡を３０枚近く持っている古墳が発見されています。調べていくと、この鏡と同じ鋳型を使った鏡というのがあります。あるいは、それを粘土



西三河におけるおもな前・中期古墳の分布

5　三角縁神獣鏡　百々古墳出土（大阪歴史博物館提供）
三角縁神獣鏡とは中国の神仙や霊獣を表現した、縁の断面が三角形のものを指す。

か何かで型を取って同じように仕上げた鏡が沢山出てくるというのがありまして、椿井大塚山という古墳は、３０面近く鏡を持っています。それと同じ鋳型で作られた可能性の高い鏡、大体１つの鋳型で５枚ぐらいは同じ鏡が出来
るのですけれども、その鏡の所有の関係を見てみましょう。椿井大塚山古墳は京都府の山城、奈良に近い側にあるのですが、そこを中心にしながら、網の目状に分布しています。もしかすると、この古墳には、大和の中心部の王様の鏡を管理していた人が埋葬されているのではないかという話が出てきます。この鏡を全国各地の豪族に「子分になれ」、「お前は言うことを聞くから鏡をやろう」という意味合いで、渡していたものではないかと言われています。その鏡がひとつ豊田で出てきている。もうひとつ兵庫県でも同じ鏡が出ている。ですから中央の権力者が何枚か鏡をストックしながら色んな地方の豪族に渡していたのではないかと言われています。

この三角縁神獣鏡は、実は、一時期までは、ずっと魏の鏡と言われていました。魏の鏡というと「魏志倭人伝」に出てくる魏の王様から卑弥呼が鏡を１００枚ぐらいもらったという記録が残っています。それらの鏡が次の時代になって色んなところへ配られたのではないかと言われていたのです。しかし、今では中国で同じ鏡が出土していないので、この鏡は日本製ではないかという話になったり、中国の技術者が渡ってきて日本で作ったのではないか、といういろいろな説がでてきています。でも、少なくとも同じ鋳型、鏡台の鏡が各地の古墳で出てきているということは、どこで作られたかという問題は別にして、中央の権力の示し方の指標になる鏡ではないかと言われています。

図２　墳丘測量図（加納 2004より）

古い古墳は豊田のほかに、もう一カ所、実は安城に出てきます。安城の二子古墳です。右の図を見て頂ければ良いのですけれども、こういった形の古墳を何というか知っていますか？皆さんが例えば大王の墓として知っている古墳の形とはちょっと違います。多分皆さんは、例えば大きい古墳でご存知なのは仁徳天皇陵という話になるわけですけれども、あれは前方後円墳です。これは丸くなくて四角です。前方後方墳と言います。こういった前側に四角い台がついて、後側に多分ここに人を葬ったと思われる四角い丘がつくという古墳が、４世紀の前半

台に出てきます。奈良辺りだと前方後円墳が最初の古墳として出てくるのですが、何故か西三河で最初に出てくるのは前方後方墳。こういう形の古墳の中心のひとつが実は尾張にありまして、尾張に非常に前方後方墳が多いと。このことは「魏志倭人伝」で邪馬台国の卑弥呼に敵対していた狗奴国という国があるのですが、その狗奴国の中心が尾張にあったのではないかとも言われています。尾張の勢力範囲の中だから大和的な前方後円墳ではなく、こういう前方後方墳が造られているとおっしゃる先生もおみえになります。その辺は真偽の程は難しいですけど、西三河では、前方後円墳ではない、非常に地域性の強い形の古墳が一番最初に造られたというのが分かっていただけると思います。

安城の二子古墳、これは８０メートルぐらいのかなり大きい古墳です。このような古墳を造れるというのはそれなりの権力者が安城にいたということです。そして、安城にいたというのは岡崎にはいなかったということです。岡崎も古墳時代の墓がないわけではないのですけれども、古墳という形でしっかりしたものがあんまりないのです。未発見というわけでもないだろうと思います。岡崎駅の西では本当に一辺４.５メートルの低い四角い段を造って、周りに溝を掘りめぐらせている方墳というのが出てきています。この方墳は古墳時代にできたものですが、基本的には弥生時代の方形周溝墓というお墓の造り方そのままです。そして、変な話ですけれども、狭い範囲に何ヶ所も点々としていて、あまり立派なものもない。あまり階級が分かれていないのかもしれないということが考えられます。ひとつひとつの古墳の差が全くないわけではないけれども、規模の大きい古墳が出てくるのは安城から。変な言い方かもしれませんけれども、安城をトップとするピラミッド構造の中で、岡崎は安城の傘下だったと。残念ながらそういう話です。２７ページの西三河の古墳編年図をご覧ください。安城の二子古墳があります。矢作川の中流域では、この時代、安城と豊田を挟んだこの地域にあまり古墳が出てきていません。ある面では安城と豊田の田んぼの方の間に挟まれた地域ということで、まだそんなに力を持っていなかったのかもしれません。

図２　墳丘測量図（加納 2004より）

安城二子古墳の次の段階では、姫小川古墳と塚越古墳がでてきます。右のが姫小川古墳です。丸い後円部に細長い前方部が付くという非常に古いタイプです。塚越古墳は４世紀の後半台にできた、二子古墳と同じような地域にある古墳です。不思議なのは安城の古い古墳というのは、二子古墳とその次の段階で姫小川古墳が出来て、塚越古墳が出来るとぱったりと止まるってしまいます。その後の時代、古墳が全然ないのです。本当はこの近辺が一番の矢作川流域の中の先進地域というか、今でいう中心市街地だったかもしれない

ところなのですけれども、４世紀台でパタっと止まってしまうのです。

そして、少し北へ上がったところ、矢作に和志山古墳が出てくる。宮内庁所陵墓の所管の五十狭城入彦の墓と言われているお墓です。本当にその人が葬られているかは分かりません。ここは岡崎唯一の宮内庁の御陵墓参考地なのですけれども、この指定地というのが地方では割といい加減な指定なのです。というのは、明治７年頃、全国に御陵を造らなくてはいけないといって、どれを指定するか現地をいろいろ見に来て、これが良いと決めた古墳です。ただ実際も本当に古い状況を示しています。四角く括ってありますけれども、これは前方後円墳です。今は外護柵があって、宮内庁の所管なのでたまに巡回にみえるみたいです。

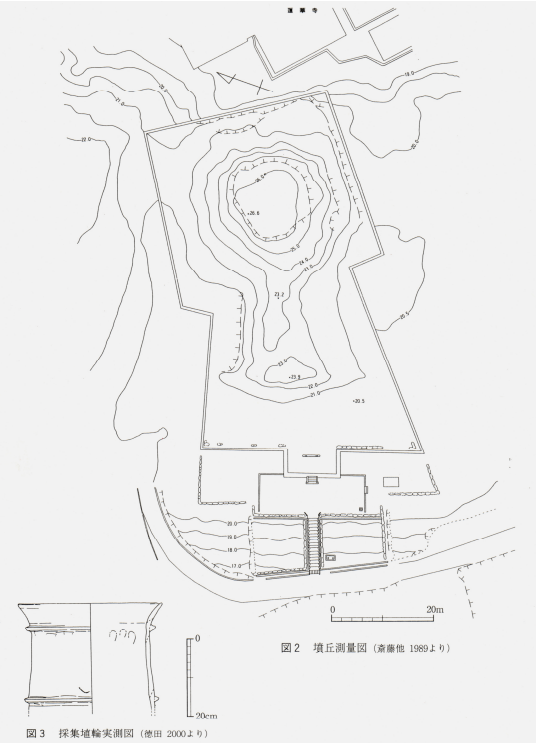


図２　墳丘測量図（斎藤他 1989より）
図３　採集埴輪実測図（他田 2000より）

右に埴輪の図が出ています。これは次に話す於新造古墳の埴輪ですが、古墳の年代を決めていくのはこのような埴輪になります。古墳の見極め方は面白いでしょう。この埴輪、実はあんまり古くないと思われていたのですが、丸く抜かれた部分が端で少し出っ張っています。埴輪の見方なのですけれども、まん丸ではないでしょう。巴みたいなデンデン太鼓のような模様になるのです。埴輪を専門に勉強している人が見ると、これは古いタイプの埴輪です。考古学というのは、話としてはスケールが大きいことを話すかもしれませんけれども、日々の勉強というのはそういう細かいところを見ております。例えば、突帯っていうのですけれども、これが何段あるかというようことで調べてみたり、この突帯の作り方で年代を決めていきます。埴輪を作って

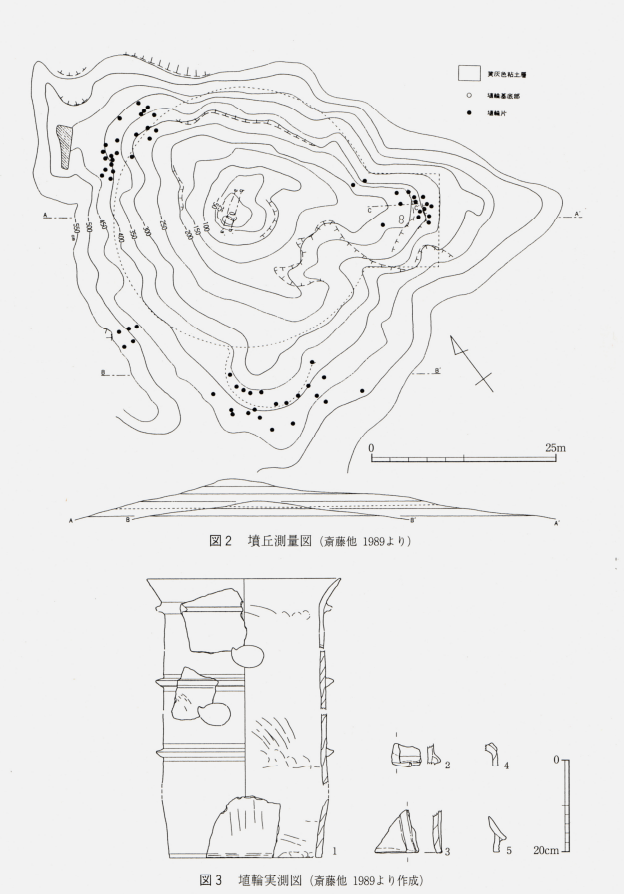


図２　墳丘測量図（斎藤他 1989より）
図３　埴輪実測図（斎藤他 1989より作成）

いる時に、こう撫でているか、こう撫でているかの違いとかね、そういうのを細かく積み重ねながら年代を見極めていきます。この埴輪と比較して和志山古墳の年代も決めています。

４世紀の後半台でも割と古い方に属する於新造古墳が阿知和町にあります。この古墳は、実は前方後円墳ではなくて、帆立貝型の古墳と言いまして、前方後円墳の変形みたいな古墳になっています。やっと岡崎に立派な古墳がということですが、これもでも大きさは３０メートルそこそこでそんなに大きい古墳ではありません。

「志賀高穴穂朝。以物部連祖出雲色大臣命五世孫知波夜命」というのが参河国造だと前に話した『先代旧事本紀』「国造本紀」に出てきます。知波夜というと何となく阿知和に繋がっていくでしょう。大体、国造というのが出てくるのがふつう６世紀頃です。これは４世紀の後半なのでちょっと古すぎるのですが。逆に言えば、このような古墳の伝承がこういうところに伝えられているかもしれない。この古墳が国造のお墓だとは思いませんけれども、この地域に後に国造と呼ばれるようなレベルの人達が現れたんではないかということを考えさせる古墳のひとつです。

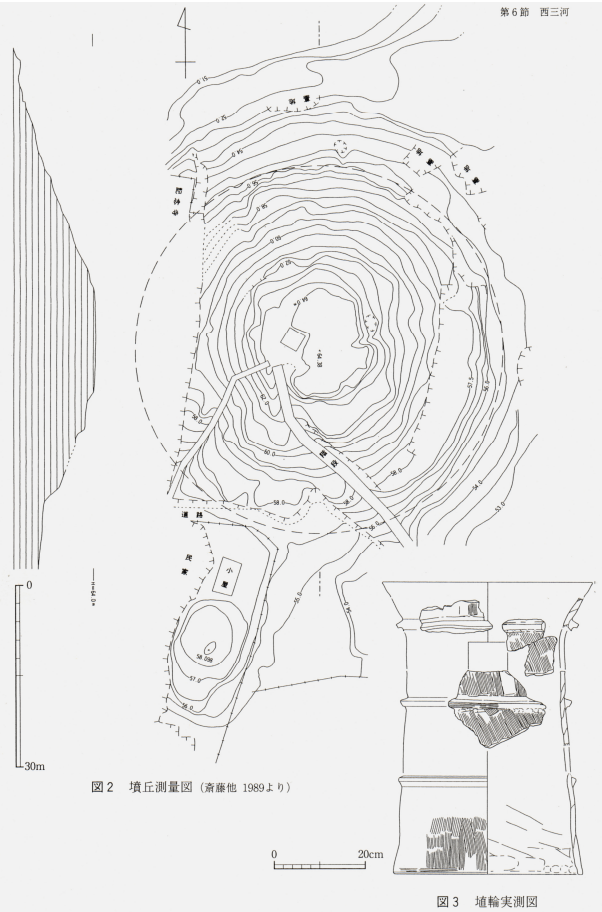


図２　墳丘測量図（斎藤他 1989より）
図３　埴輪実測図

４世紀の前半から後半にかけては今お話した通りですけれども、実は４世紀に一番後半の終わりぐらいになって、大きい古墳がやっと岡崎の中に出てきます。これは皆さんもご存知だと思う。市民会館の横に甲山古墳というのがあります。今まで余り注目されていなかった古墳です。古い古墳があるのは安城、豊田ということで、意外に見過ごされていた古墳です。今は市の指定史跡になっています。実はこの古墳ずっと直径６０メートルの円墳って言われていたのですよ。６０メートルの円墳は結構大きいのですよ。さっき言った於新造なんて３０メートルちょっとですから、それに比べればかなり大きいですが、それなりの権力をもった人がいたのかなぐらいで終わっていたんです。

実は最近、大変なことが分かってきました。最近私たちの仲間で北村さんという人が丹念に調査をして、実は名古屋にあります白鳥塚という、これも４世紀の終わりぐらいの尾張の東谷山というところの麓にある前方後円墳ですけれども、それと同じ形じゃな

いかということに気がついたのです。これは昔から測量、市史の段階で測量調査をやった段階から言っていた人もいますけれども、そうすると、これは大変な話になるのです。これから私なんかは１００メートルを越える前方後円墳にしていこうと思っています。この話が出た時に、吉良町さんと豊川市さんに仁義を切って、前方後円墳にするからねっていう話をしないといけないんです。申し訳ないけど１００メートル超えるよって。というのは、今までに三河で一番大きい古墳っていうのは１００メートル前後だったんです。これは後で出て来ますけれども、吉良町にある正法寺古墳と、豊川の船山古墳が競い合っています。当初、船山古墳は９０メートル強といっていたのを、発掘調査をする中で前方部がはっきりしてきて、１００メートルぐらいになることがわかってきたわけです。そうすると、今度は吉良町の正法寺古墳が２番手になってしまいます。吉良町も調査をして、古墳の形をはっきりさせていったら少し伸びて１００メートルになったところでした。こんなふうに古墳の大きさでせめぎ合っている間で、この甲山第１号墳が１００メートル以上であることがわかりました。４世紀の後半台、この古墳が一番大きいのです。６０メートルの円墳だとしても、大きい古墳なのですが。

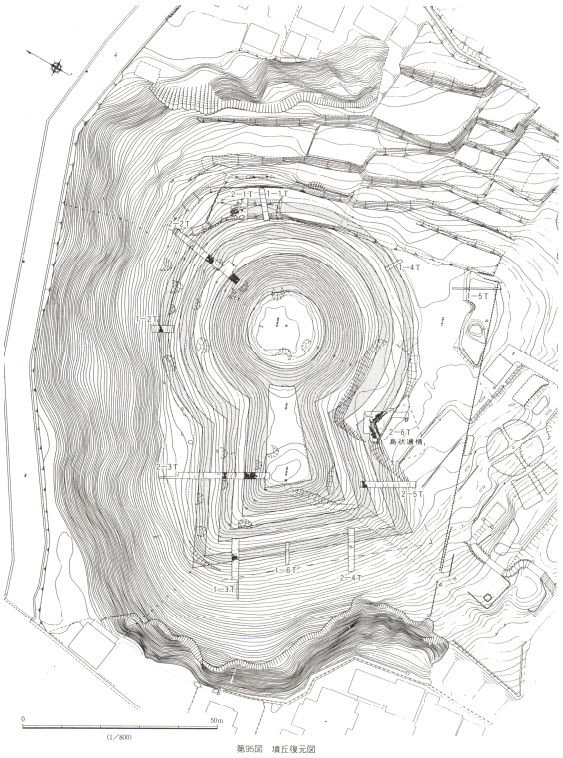
甲山会館横にお茶室があって、甲山閣なんかがあるんですけれども、そこを登ってみると矢作川の中流域を広く見渡せる。非常に良いところです。やはりそれはそういうところに古墳を造ったということですから、かなりしっかりした勢力、本当に矢作川の中流域をしっかりと抑えていた地方の豪族のお墓だったんじゃないかと言われています。たぶんこれはまだ、市の教育委員会の方は甲山古墳は円墳だと言うかもしれませんけれども、その辺はご容赦頂きまして、１００メートルを超える前方後円墳ということで皆さんには覚えて頂ければと思うんです。

甲山古墳が出来た直後ぐらいにできたのが、先程言いました吉良の正法寺古墳です。この古墳からは、凄く色んなことが判ります。甲山古墳は、丘陵の頂上にある古墳ですが、正法寺古墳の周りは海なのです。

正法寺古墳と三河湾（北より）

この古墳の近辺は江戸時代の干拓地なので、これは海に臨んだ古墳なのです。海に臨んだ立派な古墳は誰が見るのか。古墳は勢力を誇示するためのものでもあります。仁徳天皇は、どこまで行っても全体が見えないような巨大な古墳を非常に強大な権力の象徴として造りました。海に臨んで造った古墳をどこから見るのかといえば、船からです。基本的にはそういう面を考えれば、この伊勢湾、三河湾の船の海上交通を牛耳った地方の豪族がここに葬られていると考えられます。形は写真をご覧ください。

東が海側です。大きさは１００メートル強です。近くに見える前方後円墳みたいな形のものは違いますよ。これは古墳にちなんで造ったものです。本体はその上です。この古墳はパッと見て頂くと、途中に一段、段があるのです。これは段造りといって丹念に



第95図　墳丘復元図

段を造りながら構築している。これは当時、古墳時代の中心である畿内での作り方に非常に近い畿内型の古墳です。問題は裾の部分です。前方部と後円部の接続する部分の裾に変なテラスがありました。このテラスは何だろうなと思っていたら、この部分からも埴輪が出てくる。注目は四角いテラス部分です。

実は、三河湾から越えて、伊勢湾を挟んだ反対側の松阪市に宝塚１号墳という古墳がありますが、形がそっくりなのです。この古墳もテラスの部分があり、そこからから色んな埴輪が出て来ている。家の形をした埴輪だとか、実は大きい船もでてきてるのです。この船は、死者の為の船という考え方もありますけれども、この古墳を造ったのは、実際に海上交通を牛耳ってた伊勢湾の向こう側の偉い豪族だったというふうに言われています。海を越えた反対側にも同じような古墳を造る人がいたということが、本当に伊勢湾の海上交通を双方で牛耳っていということを物語るのではないかなと考えられます。

ここで宝塚の埴輪を見てみます。井戸の埴輪です。囲いがあって井戸があって、その上に井戸を覆う家がちゃんと建てられている形です。もうひとつの写真は良く判らないですけど、排水遺跡です。水を扱った。これは４世紀の後半から５世紀の初頭にかけてそういったものが造られていくようです。

キーポイントは海上交通です。ただ、これが最後なのです。２７ページの西三河の古墳編年図を見て頂きますと、甲山古墳の少しあとに正法寺古墳が出てきます。ここで非常に大きな変化が出てきます。見て頂くと判るように、このあとの年代には、きちんとした前方後円墳が西三河では造られなくなってしまいます。それに対して、東三河には前方後円墳が盛んに造られていきます。

６．東三河と西三河

２８ページの東三河の古墳編年図をご覧ください。音羽川流域に船山古墳という大きな古墳が出て来ます。さっきお話した正法寺古墳と大きさを競っていた豊川の古墳です。その丁度すぐ後から、小さいながら前方後円墳が多く出来てくるのです。船山古墳も実は今の豊川の「国府」と言っているところの近くにあるのです。豊川の「国府」の近くには、「御津」というところがあります。遺跡としてはっきりはしていないのですが、地名からの判断ですと、「御津」と言うのは津なのです。港なのです。「国府」と「御津」

がセットになって豊川近辺、国府町近辺が権力の中心になっていったのです。あと、東三河の方で点々と小さい前方後円墳が、三河湾の沿岸にいくつも造られていきます。

要するに５世紀の頭ぐらいまでは西三河の非常に大きな権力をもった甲山古墳、正法寺古墳があって、その後の段階は実は東三河に権力が移っていった。だから、逆に言えば最終的には、「国府」はその権力の基盤のあったところに造られたということが考えられます。要するに古墳時代の三河を考える時に、５世紀前半までは西三河は非常に権力が強かった。それからは東三河が徐々に力を付けて、権力の中心は東三河に移ったということです。

東三河では船山古墳という大きな古墳ができて、その後は小さい古墳ながら色々と金銅製銀製の副葬品を持った古墳が多く造られていき、最後は馬越長火塚という古墳に繋がっていきます。この古墳は、豊橋市北部にあるのですが、愛知県最大の横穴式石室をもった古墳で、実は６世紀にみえた欽明天皇のお墓と言われる古墳を縮小した形をしています。前方部が細長くて極端に低いという、同じ形なのです。欽明天皇に仕えていた地方の豪族のひとりのお墓ではないかというふうに言われています。豊橋周辺には、前方後円墳が多く造られて来るんですが、西三河とは全然違う状況を示しています。

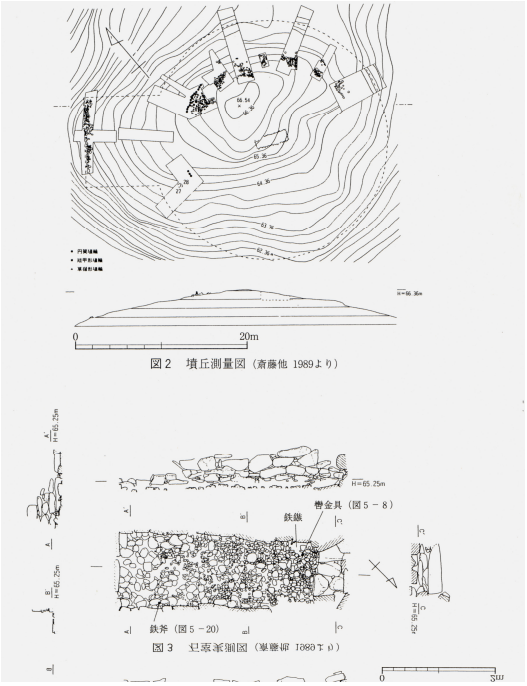
このように、大きく地域の役割が変化していったのが判ると思います。ただ、大きい古墳を造って金ピカの物をたくさん貰うのが良いのかどうかという話は別の意味もあります。例えば変な言い方かもしれませんけれども、西三河はこの後ですね、前方後円墳を造らなくなった。それに対して東三河では、大体６世紀代に前方後円墳を造って、６世紀の真ん中ぐらいに馬越長火塚が出来るのですが、実は関東地方を除いて、この時代、６世紀の真ん中まで前方後円墳を造り続けるところはあんまり無いのです。だから西三河は先進的だったと言えば先進的だったのかもしれません。

というのは、その次の段階ででてくる古墳のあり方が全然違うのです。吉良の正法寺を受け継ぐ、岩場古墳という古墳があります。これは埴輪をお墓の一番の中心の棺に使った古墳になります。

前方後円墳は、たったひとりのためにお墓を造って、中の石室にたったひとりを埋めるというお墓です。西三河では前方後円墳は造られなくなりましたが、横に出入りが出来るような石室のある先端的な古墳が、実は５世紀の後半から造られ始めるのです。それは朝鮮半島で使われていた石室の形が北九州に入ってきて、北九州から多分こちら側に伝わって来たと思いますけれども、要するにこれもこの地域の豪族が、また海上交通をしっかり担っていたことと関係があると思われます。横穴式石室がある古墳、それは西三河で、この新しい古墳の作り方を積極的に取り入れた結果なのです。

西三河の横穴式石室としては、幡豆の中之郷古墳があります。真四角なのですけれども、竪穴式石室みたいな石室に羨道がつくという形になります。

右の図は岡崎市丸山町にある経ヶ峰古墳です。これを発掘した段階では、これは竪穴式石室と言われていました。ただ、竪穴式石室とは長方形の石室の中に人を葬るのですけれども、この古墳は石室の壁の石の積み方が一部で違っていて、横の壁が取り外しがきくのです。そうすると、横穴式石室になってしまう。経ヶ峰古墳からは甲冑が出てき



ました。愛知県の指定文化財ですが、岡崎には残っていません。今は、名古屋市の博物館に入っています。もう数年岡崎市の美術博物館が早く開館していれば岡崎の物になっていたかもしれませんけれども、タイミングを逃しまして、名古屋市に買われてしまったものです。

豊田の神明社古墳も、竪穴系なのですが横口が付きそうだとも言われています。

外山１号墳というのは、イオン・ショッピングセンターの敷地内に移築され古墳公園として残されています。これも竪穴式石室状なのですけれども、横にやはり羨道が付くという形で、経ヶ峰同様、新しい様相を成しています。

古墳時代も後半になると特殊な、例えば、胴が丸くなっている古墳が出てきます。これは胴張型といい、横穴式石室にどんどん取り入れられて行きます。また、人を葬る部屋（玄室）が２室に分かれる古墳もつくられます。西三河に特徴的な要素をもつ古墳が出てきて、それが各地に波及するというような形になります。

７．まとめ

最初にお話したように、地域の区分にはやはり様々な見方があります。他地域と交流で幅もでてきます。古墳時代にも川や海はありました。海上交通もありました。海上交通があって三河湾の正法寺古墳があり、川を遡って経ヶ峰古墳に新しい石室が伝わったのでした。この水上交通があって、地域の世界が非常に大きく広がったのでした。岡崎にとって、地域を越えていく大事な要素、それが川なのです。非常に気になるのが、皆さん良くご存知の歌があると思う。本当はこの話がしたかったのです。

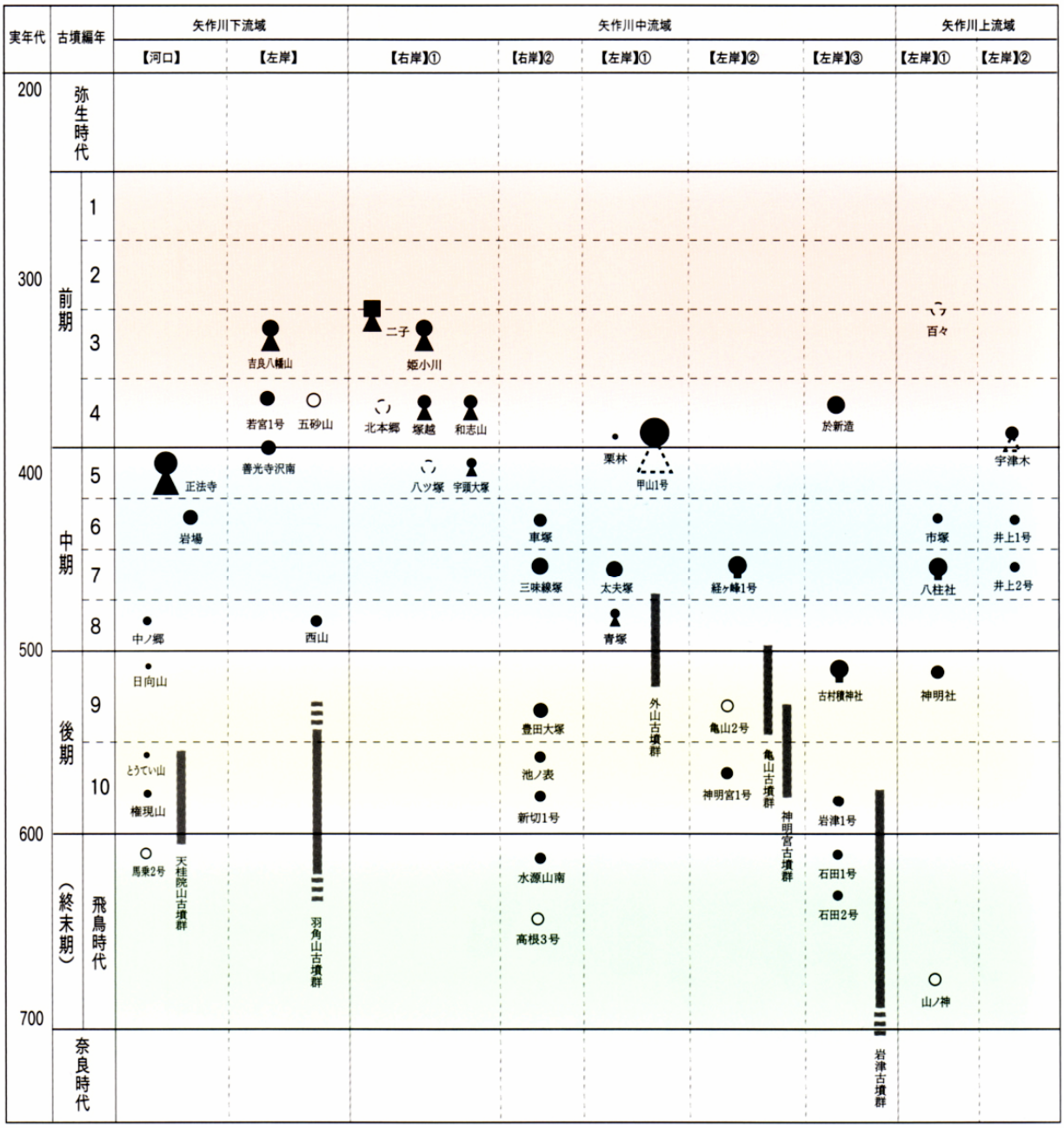
「五万石でも岡崎様は、お城下まで舟が着く」

皆さんこの歌良くご存知ですよね。この歌、良いけど、卑屈なのです。何ですかこの５万石でもって。そう思いません？多分この時、西尾は６万石なので、石高で負けているからこういう話になるのでしょう。でも、この中の言葉で「お城下まで船が着く」、これが大事なのです。お城があります。川があります。お城下まで船が着くわけです。こういう水上交通があります。川の近くには城下町が広がっています。宿場町が広がっています。お城の近くには東海道が走っています。岡崎は、この縦に貫く南北の水上交通の中継点として非常に重要なところです。東西の陸上交通の要路、東海道の重要な宿場町でもあります。結節点として南北東西の軸をきちんと抱え込んだこのような城下町は他にないですよ。豊橋だってすぐ北に川はあるけれども海に近い、東海道は中途半端

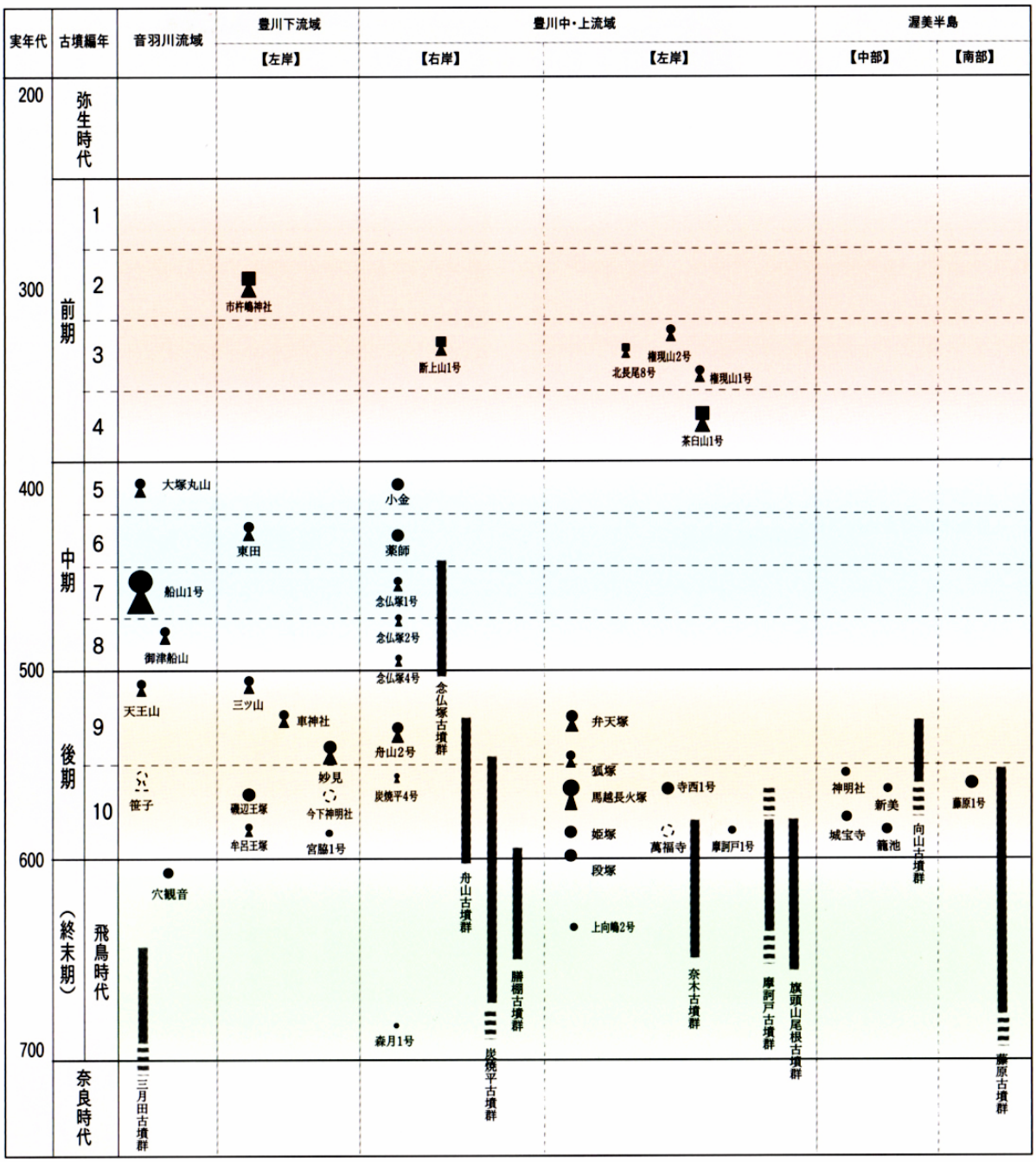
なところを走っていますし、西尾でもそうでしょう。西尾城近くに水運拠点があるわけではない。中畑という離れたところの川湊しかないのです。岡崎で画文帯神獣鏡という鏡が出土しています。同じ鋳型でつくられた鏡が２３面あるもので、丸山町の亀山２号墳というところから出た鏡なのですが、その鏡が伊勢湾を越えたところから何面も出てきており、あと大事なところでその間を埋める神島にも一面あります。外洋から伊勢湾へ入る一番の難所にある神島にも同じ鏡が奉納されているのです。神島には縄文時代の最初から人が住んでいて、古くから海上交通の聖地として知られています。みんなあそこへお参りしてから移動するわけです。そんなところと一緒の物を持っている。これも矢作川を遡上した亀山の古墳と大きな関わりが想定されます。

南北の軸と、東西の軸が交わった、そこに岡崎がある。その同心円は大きく南北に広がる時がある。大きく東西に広がる時がある。その収縮を何回も何回も繰り返しているのがこの地域なのではないかなと。古い時代を見ていくとそのように感じられます。そういったところで「五万石でも」と言うのはやめようというのが私の話です。

考えていたことの半分くらいしか喋れませんでしたけれども、本当に熱心に聞いて頂いてありがとうございました。


実年代
古墳編年
矢作川下流域
矢作川中流域
矢作川上流域
【河口】
【左岸】
【右岸】①
【右岸】②
【左岸】①
【左岸】②
【左岸】③
【左岸】①
【左岸】②
200
300
400
500
600
700
弥生時代
前期
中期
後期
（終末期）
飛鳥時代
奈良時代
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
正法寺
岩場
中ノ郷
日向山
とうてい山
権現山
馬乗2号
天桂院山古墳群
吉良八幡山
若宮1号
五砂山
善光寺沢南
西山
羽角山古墳群
二子
姫小川
北本郷
塚越
和志山
八ツ塚
宇頭大塚
車塚
三味線塚
豊田大塚
池ノ表
新切1号
水源山南
高根3号
栗林
甲山1号
太夫塚
青塚
外山古墳群
経ヶ峰1号
亀山2号
神明宮1号
亀山古墳群
神明宮古墳群
於新造
古村横神社
岩津1号
石田1号
石田2号
岩津古墳群
百々
市塚
八柱社
神明社
山ノ神
宇津木
井上1号
井上2号

西三河の古墳編年図


実年代
古墳編年
音羽川流域
豊川下流域
豊川中・上流域
渥美半島
【左岸】
【右岸】
【左岸】
【中部】
【南部】
200
300
400
500
600
700
弥生時代
前期
中期
後期
（終末期）
飛鳥時代
奈良時代
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
市杵嶋神社
断上山1号
北長尾8号
権現山2号
権現山1号
茶臼山1号
大塚丸山
小金
東田
薬師
船山1号
念仏塚1号
念仏塚2号
御津船山
念仏塚4号
念仏塚古墳群
天王山
三ツ山
車神社
弁天塚
舟山2号
狐塚
妙見
笹子
磯辺王塚
今下神明社
炭焼平4号
馬越長火塚
寺西1号
神明社
新美
藤原1号
牟呂王塚
宮脇1号
姫塚
萬福寺
摩訶戸1号
城宝寺
籠池
向山古墳群
段塚
舟山古墳群
穴観音
上向嶋2号
勝棚古墳群
奈木古墳群
摩訶戸古墳群
旗頭山尾根古墳群
森月1号
炭焼平古墳群
藤原古墳群
三月田古墳群

東三河の主な古墳編年